

〈原著論文〉

ホイットマンにおける 19 世紀前半の「人格主義」

山 内 彰*

Walt Whitman's 'Personalism' in His First Career

Akira Yamauchi

要旨：アメリカ 19 世紀を代表する詩人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) が生涯をかけて創り上げた「人格主義」の内容ならびにその発展過程を考察した。本稿では、特に「人格主義」の初期の考え方に焦点を当てて論及した。アメリカ的な新しい概念を創出するにあたって、その当事者であるアメリカ国民にどのような資質を求めたのかを考察する。

Abstract: This thesis deals with Walt Whitman's concept, 'Personalism.' It especially pursues its origin, development, and thoughts in the first career of Whitman. This thesis focuses on what kind of national quality is required by the poet to create a new concept suited for the new American democracy.

Key words：ホイットマン Walt Whitman 人格主義 Personalism アメリカ民主主義 Democracy in America

I 19 世紀アメリカの変化

19 世紀に入り、アメリカが一定の国力をつけ始めると、それまでヨーロッパの模倣を中心としていた価値観や生活に対する疑義が大きくなってきた。特に、社会が従来の徒弟制度を中心とした職人的世界観から、資本主義的世界観へと変化すると、こうした社会の変化に戸惑う声や、批判的な声、あるいは、以前の静的で安定的な世界へ戻りたいという懐古的な声などが多く聞かれるようになった [Thomas 80-83]。

19 世紀のアメリカを代表するウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) もこうした潮流の中で生きていた。彼の経歴の初期において、その代表作である『草の葉』 (*Leaves of Grass*) からは考えられないような、道徳を呼びかける倫理的な著述が多数生まれ出たのも、当時の時代背景によるものだと言わねばならないだろう。新しい時代へと向かう民主主義国家アメリカにおいて、どのような道徳が必要とされるのか、どういった人間がアメリカ人として理想的なのかという点は、ホイットマンにとってきわめて重要な関心事であった。そのため、彼の初期の小説や新聞記事には倫理やモラルに関する逸話や記述がいくつも展開されることになる。たとえば、『フランクリン・エバンズ』 (*Franklin Evans: A Tale of the*

Times) という 1842 年に書かれた禁酒小説には、次のような作者から読者への呼びかけ部分が登場する。

The story I am going to tell you, reader, will be somewhat aside from the ordinary track of the novelist. [...] Yet its moral [...] will be taught by its own incidents, and the current of the narrative. (*UPP* I 103-4)

『フランクリン・エバンズ』という小説は、その中身として「モラルを教えられる ('moral...will be taught')」ために書かれたものだとホイットマンは説明している。飲酒は不道徳であり、アメリカ社会にそぐわないものだから注意を読者に促したいというわけである。そして、この小説を世に問うた後、ホイットマンは、*Daily Eagles* 紙に次のように書いて、人としてきちんとした過ごし方をすることが、モラルを獲得し、社会生活の基盤となると教授している。

To those who are just entering upon manhood, the paths of science present pleasures of the most alluring kind. If the young men of Brooklyn, instead of spending so many hours, idling in bar-rooms, and places of vapid, irrational unamusement, were to occupy their time in improving them-

受付日 2022. 5. 2 / 掲載決定日 2022. 7. 21

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

selves in knowledge, happy would it be for them, and the city too! (*The Journalism* II 151)

特に青年期にある人物はその過ごし方に注意して、自分の知識を高めるために時間を使うべきだと論じている。この部分は『草の葉』で自由奔放な生き方を称揚した詩人とは思えないほど保守的にも聞こえる文言であるが、当時のアメリカでは当然視されていた警告であり、新聞の編集者としてはごく当たり前のことを書いたままだとも言えるだろう。いずれにせよ、適切な社会生活を営んでいくためには、モラルをしっかり獲得することが肝要であるとされたわけで、ホイットマンの書く小説もそうした社会的要請に対応した筋書きになっているのである。そして、道徳をきちんと持つべきだという教訓は国民の年齢に関わりなく、社会全体で幅広く実践されるべきだとして、次のように主張を展開している。

A prudent, sober, and temperate course of life cannot be too strongly taught to old and young; to the young, because the future years are before them-to the old, because it is their business to prepare for death. [*UPP* I 128]

若者だけでなく、老人も「賢明で素面でまじめな人生」を「教えて教えすぎることはない」と彼は述べている。こうした考え方はホイットマンの最初期からあったらしく、現存する最も古い彼の書いた新聞記事 (*Long-Island Democrat* 紙 1840 年 4 月 28 日) にみられるのは、たばこの害について書かれた警告文である。この記事の中で、たばこのような害悪はよくない習慣によってもたらされるのだと力説している。

Custom may, and does, enable some people to become so habituated to these things, that they produce no very evident evil. But it is still not less the cause that they *do* produce evil. They weaken the strength of the nervous system; they alternately excite & depress the powers of the brain; and they act with constant and insidious attacks upon the health. (*Journalism* I 19. Emphasis Whitman's)

すなわち、禁酒や禁煙といった悪い習慣を絶つことが年齢に関係なく重要であり、また、それを教える義務が編集者や小説家に存在すると、ホイットマンは信じていたわけである。このややもすれば教条主義的などでも呼ばれそうな発想は、自由を旨とする民主主義の詩人ホイットマンという像と合致しないような気がするかもしれない。しかしながら、ジャーナリズムの最初期からこうし

た倫理面への関心を抱いていたという事実は、生涯、一貫して変わらないものである点にも注目しておかねばならないだろう。

当時のアメリカは、資本主義化、市場化、商品化、個人主義の波など、次々に大きな変化が社会全体を覆い始めた時期であり、新しい社会に対応していくことができる個人とはどのような人間なのか—アメリカという新しい社会に必要な人間とはどういう人たちなのか—を考え出す必要に迫られていた。言い換えれば、ホイットマンはその最初期から、アメリカという新しい国と時代に必要な人間の理想像を探し求めていたと表現してもいいであろう。

本稿では、特に初期のホイットマンがどのような人間像を理想と掲げたのかを分析したい¹⁾。70 年以上生きた、当時としては比較的長い彼の人生の中で、その理想像が変化した部分もあるが、ほとんど変わらなかった部分もある。本稿ではそうした部分に留意しながら、新しい時代と混乱へと向かう時代にあって、アメリカにおけるホイットマンの理想とした人間がどのようなものだったのか、特に彼の生涯の前半部分を中心に検証してみたい。

II 求められる人物像

19 世紀も半ば近くになると、アメリカの国力は増大し、次第にその力を世界に知らしめるようになった。国力の向上につれて、それまでヨーロッパの模倣にすぎなかった文化から、アメリカ独自の文化の創造へと人々の関心は向かい、実際、アメリカ特有のものを創り出す運動が盛んになっていく。たとえば、“*Laws for Creations*” という詩の中で、ホイットマンはアメリカにふさわしい文学者が必要だと訴えている。

Laws for creations,
For strong artists and leaders, for fresh broods of teachers
and perfect literats for America,
For noble savans and coming musicians. (*Variorum* II 310)

「創造の法則」として「アメリカにぴったりな文学者」が求められており、それは「芸術家」や「リーダー」でも同じだとされている。そして、『草の葉』を自己宣伝した文章で、そうしたアメリカに適合する人物は特別な人間ではなく、むしろごく普通の人間にこそ求められるのだと主張している。『草の葉』の目的について語った一節に、次のような言葉が残されている。

It aims to project into literature a conception of the new democratic man, —a type larger, more copious, more candid, more religious, than we have been used to. It finds its ideals, not among scholars or in the parlor or counting-houses, but among workers, doers, farmers, mechanics, the heroes of land and sea. [Burroughs 75]

ヨーロッパと異なり、アメリカで中心となる人物とは、労働者や農民などの一般的な庶民である。彼らこそが「英雄」なのであって、決して貴族や王族が英雄なのではない。アメリカにおいては、階級や血筋に基づく在り方に価値があるのではなく、その出自に関係なく、労働し、勤勉に働く者が理想なのだ、ホイットマンは説いている。つまり、従来ヨーロッパにはなかった新しい人間像が、アメリカでの新しい理想像として掲げられているのがわかるだろう。

こうした民主主義国家アメリカにふさわしい新しい人間ならびに新しい社会というものは、19 世紀のアメリカの知識人のみならず、一般庶民をも熱狂させた話題の一つだった。当時流行した「若いアメリカ人（‘Young Americans’）」という運動もまたその一つであるし、あるいは、思想家ラルフ・ウォルドー・エマーソン (Ralph Waldo Emerson) のさまざまな知的呼びかけもそうした動きを表したものであった [Marinacci 80]。

さて、このような文脈の中で、ホイットマンはどういう種類の人間を理想として掲げたのだろうか。それを知るためには、まず、ホイットマンの思想がアーキラ (Besty Erkkila) も指摘するように、19 世紀前期の思想というよりも、建国当時の思想に近いという点を理解しておかねばなるまい。いわば、アメリカ革命の記憶が『草の葉』全体に漂っているのである [Erkkila 6]。ここでアメリカ革命の記憶というのは、個人の自由を第一にしてとらえ、政府やそのほかの制度は個人の自由を侵してはならないという考え方のことを指している。アメリカという新国家においては、個人の在り方こそが国の在り方を決めるべきであり、法律や政府の統治形態によって決定されるべきではないという思想であった。ホイットマンの草稿（おそらく 1850～60 年代に書かれたと想定されている）には、次のような記載がみられる。

the people of this state instead of being ruled by the old complex laws, and the involved machinery of all governments hitherto, shall be ruled mainly by individual character and conviction.—The recognised character of the citizen shall be so pervaded by the bet qualities of law and power that law and power shall be superseded from this govern-

ment and transferred to the citizen. [NUPM I 81]

「古くてややこしい法律」というのは、もちろんヨーロッパの（当時の）王政や貴族制に基づく法律を指している。旧世界で使用されていたような古い法律ではなく、アメリカは「個々人の性格（‘individual character’）」によって統治されるべきなのだと言っているわけだ。個人の性格が、旧来の法律に代わって統治の基盤となるというのは奇妙に聞こえるかもしれないが、抑圧・弾圧する政府からの自由を第一と考える人間にとっては、ある意味当然の帰結なのである。政府は基本的によい行いをしないから、政治権力は小さければ小さいほどよいというのがホイットマンの考え方でもあった。彼の編集した *Aurora* 紙には「アメリカの制度の本当の原理は—『最高の』統治権力とは、『最も少なく』権力を行使するものであると教えている」[*Journalism* I 55] と書かれている。政府の介入がない方が人々はより幸福になるのであり、それを保証する政治制度が民主主義なのであった。また、*Brooklyn Daily Eagle* 紙では、1847 年に次のようにホイットマンは認めている。

One point, however, must not be forgotten—ought to be put before the eyes of the people every day; and that is, that although government can do little positive good to the people, it may do an immense deal of harm. And here is where the beauty of the democratic principle comes in. Democracy would prevent all this harm. [*Journalism* II 301. Emphasis Whitman’s]

つまり、政府というものは積極的「善」を国民に対してなすというよりは、「甚大な害悪」をなすものであり、それを阻止するのが「民主主義」なのであるとされるのである。ここで、政府の役割は極端にまで低く見積もられ、代わりに、民主主義に基づく個人の主張や行動を基盤とした政治体制が要請されていることが理解できるだろう。

だが、なぜホイットマンはこのように個人を自分の思想の基盤に据えようとしたのだろうか。それは、当時のアメリカにおいて、個人は自然な状態ならば健康であり、健全であると考えられる思潮があったことと関係している。本来、人間とは健康な存在だという思想と深く結びついているわけだ。フリック (John W. Frick) はアメリカにおける禁酒やさまざまな改革運動について研究した著作において、南北戦争以前のアメリカにおいて、人間は完璧な存在だと考えられる傾向があったと述べている。

Above all, antebellum reform reflected the beliefs that, since man was innately divine and perfectible (a view that had been generally accepted since the Enlightenment), it was inconceivable that he or she should be constrained by slavery of any kind, be it to another human being, to liquor, to Mammon's currency, to sex, or to the innumerable vices that plagued mankind. [Frick 49]

ここで指摘されているように、人間は本来「神聖で、完璧になりうる存在」であるから、他の人や物に対して従位に置かれるということはあってはならないのである。それゆえ、他者に依存したり、酒などの薬物へ依存したりすることも、本来の人間の在り方からは外れた、過誤とされるわけだ。ホイットマンが繰り返し、健康や健全について語るのも、この文脈のゆえなのである。1856年の『草の葉』第2版に登場した“Song of the Open Road”（当時のタイトルは“Poem of the Road”）は、次のような詩行から始まる。

Afoot and light-hearted I take to the open road,
Healthy, free, the world before me, [L of G 225]

この詩にみられるように、「健康な（‘Healthy’）」と「自由な（‘free’）」は並列されている。すなわち、政府に抑圧されない「自由な」個人というものは、そもそも「健康な」存在でなければならないのである。もっとも、この詩を読めばすぐに分かることだが、この「健康」は所与のものとして各人に最初から与えられたものでありながら、その社会的な在り方については一定の条件がつけられている点も見逃してはならないだろう。

Allons! whoever you are come travel with me! [L of G 232]

とホイットマンは自分と「旅するのは誰でも構わない」と歌いながらも、次のような警告を同時に放っている。

Allons! yet take warning!
He traveling with me needs the best blood, thews, endurance,
None may come to the trial till he or she bring courage and health, [L of G 233]

ホイットマンの警告によると、実際に詩人と旅を共にすることができる人間は「最良の血と筋肉、忍耐力」がなければならないと、「勇気と健康」を有するまでは詩人と

旅に出ることは許されないのである。一見すると矛盾しているような記述だが、すでに述べたように、南北戦争前の時代にあつては、人間は元来健康な存在であるから自由であり、本来ならば禁酒や禁煙、その他の節制も当然できるはずだと考えられていた。しかし、同時に、喫煙し、アルコール依存症になっている人間も現実にはいたわけだから、そうした場合、人の本来的な在り方ではないとして排除されてしまうわけだ。上の「警告」は、そうした人々に対して向けられたものなのであろう。

さらに、1841年の7月6日に書かれた記事では、いささかロマンチックながら、そもそも本来の人間は汚れない存在だという主張をみることもできる。

It is a faculty given to every human soul, though in most it is dormant and used not. It prompts us to be affectionate and gentle to all men. It leads us to scorn the cold and heartless limits of custom, but moves our souls to swell up with pure and glowing love for persons or for communities. [Journalism I 29]

人を愛する能力は「すべての魂」に与えられており、普段「眠っているだけ」だという。だから、愛情ややさしさへと人間を導くのが肝要だという主張である。別言すれば、人間とはそもそも「神聖」な存在だということなのである。

And that there is no God any more divine than Yourself?

And that that is what the oldest and newest myths finally mean?

And that you or any one must approach creations through such laws?

[L of G 311]

人間という存在がいかに本来優れており、神聖なものであるかという点について、かなり過激な（「あなた自身より神聖な神などいない」）描写がここに鮮明に描かれているのが分かるだろう。

だとすれば、優れた人間であるためには、このような本来の人間性が発露されればよいことになり、アメリカという国はそうした人間の健全さを促進する環境にならねばならないのだと言えるだろう。言い換えれば、アメリカが優れているのは、政治制度が優秀だからではなく、アメリカ人一人ひとりが本来の善を体現する生き方をしていると仮定されているからにほかならない。ホイットマンは先にも検討した草稿で、この点について次のようにふれている。

the people of this state instead of being ruled by the old complex laws, and the involved machinery of all governments hitherto, shall be ruled mainly by individual character and conviction. [NUPM I 81]

すなわち、アメリカという新しい国の在り方や政治制度は、直接アメリカ人の「性格や信念」によって支配されているのであり、旧来の国々のように「ややこしい法律」が支配しているわけではない。アメリカの民主主義とは、ホイットマンにとって、本来善良な人間の性格を反映する制度であり、重視すべきは、本質的に善良な人間の在り方というものを国の内部に取り込むことなのであろう。

いずれにせよ、ホイットマンの初期においては、政府から離れた自由な個人こそが健全なのであり、彼らを中心に据えた民主主義こそが最も重要なのだと考えられていたことが分かるだろう。そして、そうした新しい人間像こそ、新しい国家たるアメリカにふさわしいという信念をホイットマンは抱いていたのであった。

III アメリカらしさの追求

ホイットマンがアメリカの独自性を追求し、それに基づく文化や制度を要求している部分は、彼の著述のあちこちに散見される。19 世紀のアメリカではヨーロッパ文化の受け売りから脱却し、アメリカ独自の文化を生み出すことはきわめて重要な作業とされ、多くの作家や思想家がそうした主張を繰り返していた。たとえば、ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) は、次のようにある小説の中で書いている。

we want a national literature commensurate with your mountains and rivers, —commensurate with Niagara, and the Alleghanies, and the Great Lakes! [Allen 5]

アメリカにはヨーロッパにはない自然があり、それに「見合った」「国民文学」が必要だと述べられている。こうしたアメリカの独自性は文学のみならず、すべての領域で求められたもので、たとえば 1845 年にホイットマンは新聞の中で次のように書いて、アメリカ独自の音楽を称えている。

At last we have found, and heard, and seen something original and beautiful in the way of American musical execution. [Journalism I 202]

ホイットマンにしてみれば、ようやくアメリカらしい

音楽を聴くことができたのに感動して書かれた記事であるが、同様のことがさまざまな分野で強く求められていたわけである。そして、アメリカの独自性は文化のみならず、文化を担う人間にも当然求められたわけで、一般の庶民であっても、アメリカの独自性を体現した人間であらねばならず、また、その目的に合致するように民主主義という政治体制も確立しなければならないとされたのであった。この点について、おそらく 1860 年代に記されたと思われる草稿の中では、次のように記されている。

What a spectacle will that be of future New World philosophers & poets-successive dynasties of them-depicting such life & such Death-making of average Man a God-embodying in superior poems the whole genius of Democracy, —arrived at last... [NUPM IV 1567]

ここに展開された主張にあるように、新世界にふさわしい「思想家」や「詩人」ばかりでなく、ごく「平均的な人間」を「神」として扱うような新しい在り方、そしてそれを「詩」の中で実現するために必要な「民主主義」が、最終的にアメリカに見出されるというわけである。そして、ホイットマンによれば、アメリカにふさわしいものを生み出すという作業は、思想家や一般庶民に対してだけでなく、著述という文脈でも同じように要求される。ものを書くために設けられる規則においても、ヨーロッパにはない、アメリカ独自の要素を取り入れられねばならないのである。「書くための規則 ('Rules for Composition')」と題された文章の中で、彼は次のように述べている。

Take no illustrations whatever from the ancients or classics, nor from the mythology, nor Egypt, Greece, or Rome—nor from the royal and aristocratic institutions and forms of Europe.—Make no mention or allusion to them whatever, except as they relate to the New, present things—to our country—to American character or interests. [NUPM I 101]

ここに指摘されているように、ヨーロッパやエジプトなどの古い文化については、それに直接言及するのではなく、新しい現在の物事に関するときのみ触れるべきなのである。そして、アメリカの作家は「アメリカの性格あるいは関心」にも触れねばならない。旧世界の文化を真似するのではなく、アメリカらしい性格に触れることこそ、新世界アメリカにおける著述に必要な「書くための規則」となるべきだというのが、ホイットマンの主張

したいことだったのである。

もちろん、先にも指摘した通り、こうした考え方は当時のアメリカではかなり陳腐なものであり、ホイットマン独自のものではない。しかし、この潮流に乗りながら、彼は新しいアメリカにふさわしい人物像を同時に構築しようとしていた点に注目しなければならないだろう。そして、その理想像の中には、自由で健康で、自立した個人という要素が入っていたのである。

リチャード・チェイス (Richard Chase) は、個人を出発点とするホイットマンの考え方について、次のように説明している。

He had always believed that social reform was a matter of individual regeneration, was not a political but a moral and spiritual problem. [Chase 153]

旧来のヨーロッパとの違いは、個人のモラルに基づいた、人間本来の健康な在り方を理想としている点にある。この理想的な個人が、抑圧的な政府の在り様から逃れ、より本来的な性質を発揮するとき、アメリカという新しい国が真の意味で誕生するというわけである。そして、詩人としては、後で述べるように、精神的な観点からこの問題を取り上げたが、ジャーナリストとしてのホイットマンはそのための政治的な環境について民主主義こそ必要なのだと主張している。民主主義という制度によって自由で健康な個人が確立されていくと彼は考えていたわけだ。

以上のように、ホイットマンにおいては、個人はそもそも健全で善良なものであり、アルコールやたばこといった誘惑に負けなければ、神聖な存在だという認識が最初期からあったと言えるだろう。そして、民主主義という政治制度は、健全な個人の集合体から成立すべきであり、政治権力は健全な個人の邪魔をせず、彼らを支援する存在でなければならないという考えを同時に抱いていたのである。

IV 自立した人間像

前節までで検討したように、政府からの自由、健康であること、倫理的であることなどが、アメリカにふさわしい人間の理想像としてホイットマンが掲げた要素であった。おそらく初期のホイットマンは、こうした考え方に基づいて、旧世界より優れた民主国家たるアメリカに住まうべき理想的な人間像を確立していったのだろう。しかしながら、アーキラが指摘したように、こうした理想はヨーロッパで次々に展開された歴史によって色あせていく [Errkila 1-27]。もっぱら自由を求めた戦い、あ

るいは、王政・貴族制から民主主義への脱却といった運動は、ヨーロッパでも 18 世紀後半から 19 世紀にかけて大きく展開する。しかし、そのほとんどが期待したような成果を得られず、むしろ、後退あるいは悪化の状況を示すことになった。歴史的に見れば、イギリスは王政のままであったし、フランス革命後に現れたのはナポレオン (Napoléon Bonaparte) と呼ばれる名の独裁者であった。1848 年にも「革命」が試みられるが、鎮圧されてしまう。こうした歴史的展開をみるにつけ、ホイットマンの中で、理想社会の人類史的な実現が遠のき、ともかくアメリカ国内でまず成立させるのが先だという考え方となったとしても何ら不思議はないだろう。政府からの自由という考えは依然保持され展開されるものの、1855 年の『草の葉』以降になると、そうした政治的な言説に代わって、より精神論的、神秘的、靈的な表現が多くみられるようになる。

「自由」という言葉は詩の中で相変わらず使用され続けるが、それと同時に別の表現である「自立 (‘independence’)」や「自分に頼ること (‘rely on himself’)」といった言葉が広く使われるようになる。「自由」が主として「政府からの自由」を表すのに対して、「自立」はむしろ「政府からの自立 (‘independence of government’)」も表すが、それと同等、あるいは、それ以上に、何者にもとらわれない「個人の人間としての自立」も表す。実際、ホイットマンの書き物にはこの「自立」という表現が随所で使用されている。たとえば、1846 年の新聞記事には、教育について教師が教えるべきことは、次のことだと主張されている。

We consider it a great thing in education that the learner be taught to rely upon himself. The best teachers do not profess to *form* the mind, but to *direct* it in such a manner-and put such tools in its power-that it builds up itself. (*Journalism* II 131. Emphasis Whitman’s)

教育において最重要な課題とは「自分を信頼する」ように教えることなのだという。また、1855 年初版の『草の葉』に添えられた「序文 (‘Preface’)」には、下記のような記載がある。

Liberty relies upon itself, invites no one, promises nothing, sits in calmness and light, is positive and composed, and knows no discouragement. (*1st LG* 16)

自由とは、「それ自身に依拠」したものであり、それ以外の何物をも必要としないのだと主張されている。

こうした「自立」はもちろん政府からの自由の意味や旧世界からの文化的な独立の意味もあった。しかし、それと同時に、個人の人間としての生き方や存在様式に関わるような自立の意味も大きかった。そして、ホイットマンが理想とする自立的な生き方をしている人間は、それだけで「誇り（‘pride’）」を有するに十分な存在であったのである。この「誇り」はきわめて重要なものとされ、草稿の中で、ホイットマンは以下のように書いている。

There are two of the soul, and both are illimitable, and they are its north latitude and its south latitude.—One of these is Love. The other is Dilation or Pride. (NUPM I 131)

「愛」と「誇り」が「魂」の二側面だとされている。人間はそもそも健康で善良なものであり、その「魂」には「愛」と「誇り」の両面があるというわけだ。このうち、「愛」については、『草の葉』では「シンパシー（‘sympathy’）」と言い換えられている。他者のことを理解し、いたわり、想像力を通して把握することが、個人の自立を基調とした「誇り」と並んで、最重要な要素として取り上げられるのである。この両者の関係について、ホイットマンは『草の葉 (Leaves of Grass)』の「序」で、次のように描いてみせる。

The greatest poet does not moralize or make applications of morals...he knows the soul. The soul has that measureless pride which consists in never acknowledging any lessons but its own. But it has sympathy as measureless as its pride and the one balances the other and neither can stretch too far while it stretches in company with the other. [1st LG 12]

魂は、本来「自立」しており、自分が紡ぎ出す教訓以外は認めない。それは「誇り」である。しかし、「誇り」だけでは、自立心の強い人間というよりも、自己中心的な人間になってしまう可能性がある。そこで、ホイットマンは「シンパシー」という別の概念を導入するわけである。この「自立」に基づいた「誇り」と、他者との繋がりを形成する「シンパシー」という二つの概念を有した人物こそが、ホイットマンにとって理想的な人物像となるわけだ。もっとも、ここに主張されているように、このことを何かの説教として人々に伝達する必要はない。なぜならば、すでに検証したように、本質的に人間というものは（魂というものは）、善であり、健全であ

ると考えられるからだ。

以上考察してきたように、ホイットマンの初期において、彼が理想としたのは、本来的に健全な人間であり、それに由来する自分への確信を抱いた誇り高い人間であった。そして、それは同時に他者への「シンパシー」に満ち、アメリカという新しい国家とその時代を生きるにふさわしい人間像なのであった。

こうした、ある意味素朴ともいえる人間像は、19 世紀の中葉付近から始まる、アメリカ社会全体の資本主義化、市場化、さらには、いわゆる「金びか時代（‘Gilded Age’）」の到来によって、少しずつ変容することになる。もはや禁酒や他者理解、誇りといったレベルではすまない、欲望に満ちた社会が到来するからである。そして、そのときに書かれたのが『民主主義展望 (Democratic Vistas)』であった。この『民主主義展望』の中で初めて概念として確立されてくるのが「人格主義（‘Personalism’）」である。この「人格主義」がどのようなものなのか、また、初期に設定されたホイットマンの理想像がどのように発展し、変容したのかという点については、新たに論を起して検証する必要があるだろう。

新しいアメリカという社会に対応するために、どのような人間が必要なのかというホイットマンの問いかけは、急速に資本主義化し、すべてが貨幣計算の中に閉じ込められていく新たなアメリカ社会において、いっそう激しいものにならざるをえない。ちょうどアダム・スミス (Adam Smith) が資本主義の発展に伴い、道徳や倫理を考察せざるをえなかったように²⁾、ホイットマンもまた「金びか時代」において道徳や倫理をさらに引き込んだかたちで新たな理想像を樹立せざるをえなかったのである。

混沌とした変化の激しい時代にあってどのような人物が必要なのかという問いかけは、現代の急激に変容する社会構造においても同じように考察されるべき問いなのではないだろうか。

注

- 1) どのような人間が新しい国家アメリカにふさわしいのかという問題は本稿で展開されているように、初期のホイットマンからみられる問題意識である。しかし、それが特に強く問題として提起され、理想となる概念が示されるのは『民主主義展望』を待たなければならない。この著書の中でホイットマンは、一つの理想の結実した姿として「人格主義（‘Personalism’）」を唱えることになる。この中期以降の理想像については、別稿にて考察することにした。
- 2) ホイットマンとアダム・スミスとの類似性や差異については、拙稿を参照されたい（山内）。

参考文献

- Allen, Gay Wilson. *Walt Whitman: As Man, Poet, and Legend*. Southern Illinois UP. 1961.
- Burroughs, John. *Whitman: A Study*. Houghton Mifflin Company. 1896.
- Chase, Richard. *Walt Whitman: Reconsidered*. William Sloane Associates, Inc. 1955.
- Erkkila, Besty. *The Whitman Revolution: Sex, Poetry, and Politics*. U of Iowa P. 2020.
- Erkkila, Besty. *Whitman: The Political Poet*. Oxford UP. 1996.
- Frick, John W. *Theatre, Culture and Temperance Reform in Nineteenth-Century America*. Cambridge UP. 2003.
- Marinacci, Barbara. *O Wondrous Singer!: An Introduction to Walt Whitman*. Dodd, Mead & Company. 1970.
- Thomas, M. Wynn. *The Lunar Light of Whitman's Poetry*. Harvard UP. 1987.
- Whitman, Walt. Malcolm Cowley ed. *Leaves of Grass: The First (1855) Edition*. Penguin Books. 1986.
- Whitman, Walt. Sculley Bradley, Harold W. Blodgett, Arthur Golden, and William White eds. *Leaves of Grass: A Textual Variorum of the Printed Poems*. NYUP 1980.
- Whitman, Walt. Ed. Emory Holloway. *The Uncollected Poetry And Prose of Walt Whitman*. Doubleday, Page & Company. 1921.
- Whitman, Walt. Ed. Herbert Bergman. *The Journalism*. Peter Lang Publishing. 1998.
- Yamauchi, Akira. 『関西福祉科学大学紀要』 24 号。「ホイットマンにおける『シンパシー』の概念」。1-7 ページ。